

Hokkaido U&K Journal



June 2025
Vol.01

第1巻 2025年6月27日発行

UK

巻頭言「Hokkaido U&K Journal」刊行にあたって	1
特定非営利活動法人 北のユニバーサルデザイン協議会 理事長 酒井正幸	
巻頭言「Hokkaido U&K Journal」刊行にあたって	2
日本感性工学会北海道支部 支部長 柿山浩一郎	
IT のユニバーサルデザイン	3
竹田慎一 (特定非営利活動法人 北のユニバーサルデザイン協議会 事務局長)	
日本語による外国人とのコミュニケーションのすすめ	4
酒井正幸 (札幌市立大学名誉教授)	
ユニバーサルデザインと感性評価の共通性	6
柿山浩一郎 (札幌市立大学)	
じぶんの見かた - じぶん観察日記 -	8
小宮加容子 (札幌市立大学)・細谷多聞 (札幌市立大学)	
札幌イメージコーディネート研究会 (SICS) について	10
伊藤雅彦 (株)伊藤塗工部)・大渕一博 (札幌市立大学)	
編集後記	12
「Hokkaido U&K Journal」編集委員長 大渕一博	

Hokkaido U&K Journal 刊行にあたって

特定非営利活動法人北のユニバーサルデザイン協議会理事長 酒井正幸

このたび日本感性工学会北海道支部（JSKEH）ならびに特定非営利活動法人北のユニバーサルデザイン協議会（NUDA）の合同誌 HokkaidoU&K-Journal が刊行されたことを大変嬉しく思います。刊行に向けてご努力いただいた両団体の関係各位に厚く御礼申し上げます。

本誌は両団体にとって、きわめて有意義な刊行物です。JSKEH は学術研究団体で、メンバーや多くの多くはそれぞれの研究の学術論文化を目指していると考えられます。ただ、特に学生の皆さんにとって学術論文のハードルは結構高く、そこに至るまで口頭発表等を挟むことが多いのではないでしょうか。さらに口頭発表自体もそこそこのエネルギーを要するかと思われます。一方、NUDA はユニバーサルデザインに関心のある一般市民が主たるメンバーであり、逆に学術研究と無縁の方々も大勢います。

本誌は学術論文誌でもなく、また業界誌でもないという、悪く言えばあいまい、よく言えば融通無碍の雑誌で、あえて定義すれば感性工学やユニバーサルデザインに関心のある方々が自由にかつ気楽に投稿できる居酒屋的な場であると言えるでしょう。

私自身かつてメーカーのデザイン部門に所属し 1980～90 年代の日本のユニバーサルデザイン黎明期を体験しました。欧米が官主導で法制化や規格化を中心にユニバーサルデザインを理念ベースで推進してきたのに対し、わが国は民間主導で実践的に進めてきたと感じています。当時と比べ、現在ユニバーサルデザインは私たちの生活の中にかなり溶け込み、さらには A I 技術等の進展により次のステージに進むことが期待されています。

私は次のユニバーサルデザインの課題は物理的不具合の改善の先にある「感性的側面」への対応だと考えています。この分野は「おもてなし」や「かゆいところに手の届く」日本人の得意分野であり、もちろん感性工学の主対象でもあります。

JSKEH と NUDA の連携によりユニバーサルデザインと感性工学を次のステージに押し上げていこうではありませんか。

Hokkaido U&K Journal 刊行にあたって

日本感性工学会 北海道支部 支部長 柿山浩一郎

このたび、特定非営利活動法人北のユニバーサルデザイン協議会(NUDA)ならびに日本感性工学会北海道支部(JSKEH)の合同誌 HokkaidoU&K-Journal が刊行されました。趣旨に賛同いただいた皆様、ご準備いただいた関係の皆様に厚く御礼申し上げます。

私は両団体に所属しておりますが、NUDA に所属する皆様はビジネス寄りの視点から、JSKEH に所属する皆様は研究寄りの視点から対象を捉えていると思います。そしてどちらも、北の大地北海道において、人々の生活を「より良くする」「より楽しくする」「より豊かにする」といった共通する思想を持ち合わせていると考えます。ジェームス・W・ヤング先生が『アイデアのつくり方』の中で“アイデアとは既存の要素の新しい組み合わせ以外の何ものでもない”とおっしゃっているように、異なる要素の組み合わせが起こる環境が大事かと思います。ビジネス寄りの視点・研究寄りの視点といった異なる観点からの見方が混ざり合い、新しい化学反応が起こることを期待します。

このような意味で、日々、皆様が考えていることをつらつらと書き連ねた原稿をご投稿頂けましたら幸いです。Journal というと堅苦しい印象がありますが、本誌に関しましては、ビジネスの中で感じた気づきや社会実践の中での発見、研究的観点からの社会への疑問や学生の皆さん的研究テーマ模索段階での悩みなどを文章にして頂いて、自分と向き合うことはもちろん、同じことを考えている仲間を探し出し異なる観点を発見するツールにして頂ければと思います。

NUDAとJSKEHの連携によりユニバーサルデザインと感性工学を次のステージに押し上げていこうではありませんか。

IT のユニバーサルデザイン

竹田 慎一 (NPO 北のユニバーサルデザイン協議会事務局長)

1. IT 機器を使う理由

私はホームページの作成などを仕事にするとともに色々な方、特に初心者の方にパソコン操作を教える仕事もしています。毎年 100 人以上、延べで 1500 人以上の方にパソコンの操作を教えてきました。そして NUDA でユニバーサルデザイン的な考え方を学んで自分が教えている IT のユニバーサルデザインについて思うことがありました。今回はそれについておはなしできればとおもいます。

まず、IT 機器は便利です。一昔前はコミュニケーション手段といえば固定電話が中心でした。そして情報収集の手段は新聞や本、場合によっては人対人で直接情報を得るのが一般的でした。ところが 1995 年に PHS が登場し携帯電話が普及するとどんどんコミュニケーションが細分化され、さらにいわゆる「写メ」が登場すると写真付きのメールによる会話が広がって行きました。最近では「LINE」による会話がごく普通に行われています。

情報収集の面でも日本では携帯電話の i モードから電話による情報の収集が始まり、2008 年の iphone の発売からスマートフォン（以下スマホ）が爆発的に普及しスマホでの情報収集が一般的になりました。現在インターネットでの情報収集は 7 割以上がスマホからという状況になっています。

このように便利になった IT 機器ですので多くの人にとって使わない理由はありません。

2. IT 機器とアクセシビリティ

一方でその操作性はどのように変わってきているのでしょうか。

まず、コミュニケーション用の IT 機器ですが最初は電話です。古くは「交換手」が必要でした。それがダイヤル式になり直接相手に電話を掛けられるようになりました。独特の操作が必要で、交換手よりは早いですが多少の時間が必要でした。次第にプッシュボンが普及し、より簡単に開いての電話番号を「押せる」様になりました。1980 年代になるとコードレス電話が登場し、家中のどこでも通話ができるようになりました。そしてその後に携帯電話、スマホの登場になります。交換手、ダイヤル、プッシュ式と進化し、スマホでは

画面にタッチする方式になり、さらには声で操作するようになっています。

また、情報収集手段としても操作性は進化しています。

例えば PC はキーボードからのコマンド入力から始まり、1984 年の初代マッキントッシュの GUI 採用から Windows の登場などでマウスを使った操作が一般的になりました。現在では画面に直接触れるタッチパネルやタブレット型の PC など操作が直感的になってきています。目の不自由な方はキーボードと読み上げブラウザで PC を操作したりするなど多様な操作が可能になっています。

3. 使わないと意味がない

このように操作が簡単になっているということはユニバーサルデザイン的に見ても進化していると言えると思います。子供から高齢者まで、障がいがある方も健常者も幅広く使える操作性ができます。

ところが、いろいろなコミュニティの中でお会いする高齢者の方の中には「怖い」という理由でパソコンやスマホを使いたがらない方がいます。怖さの理由は色々ありますが、何かあったときに相談することができないというのが大きな理由だと見受けられます。

そういう意味で、誰かに相談できる状況を作ることはこれから IT を使った生活を送る中では不可欠になります。人が便利な IT を補う必要性があります。それによってより UD 的な生活を送ることができるのではないかでしょうか。

どんな便利さも使わなければ意味がありません。重いお米や水をインターネットで買う、買い物に行かなくても誰かにプレゼントを贈れる、飛行機や宿の予約がその場でできる、タクシーが呼べる、など高齢者や障がいの方にこそ使ってもらいたいのが IT です。パソコンやスマホを教える立場の者として、気軽に相談できる状況を作つていけたらと思います。

日本語による外国人とのコミュニケーションのすすめ

酒井正幸（北のユニバーサルデザイン協議会）

1. はじめに

近年在留外国人が急増し、その数は2024年時点で約360万人に達している。また来日する外国人旅行者数に至っては同3600万人を越える勢いである。

こうなると、今まで外国人と縁のなかった一般日本人も外国人と接触し、コミュニケーションをとる必要に迫られるケースも増えてくることが予想される。

本稿では、こうした状況を踏まえ外国人とのコミュニケーション手段としての日本語の可能性について、ユニバーサルデザインや認知言語学的視点から考察してみる。

2. 多言語コミュニケーションの難しさ

近年、公共交通機関・施設等で多言語表示の採用が増加傾向にある。一般的には日本語に加え、英語、中国語簡体字、中国語繁体字、韓国語の4言語である。しかしながら、これをサイン、電光掲示板等へ表記すると、一言語あたりの表示文字サイズや表示時間の制限から、必要とする言語を認識しにくいケースも多々ある。これを欧米のように自国語+英語の2言語にするだけではいぶんわかりやすくなるのではないかだろうか。ただしその前提として、日本語 자체を外国人にも分かりやすい表現にする、いわゆる「やさしい日本語」化が必要である。



図1. 多言語公共サインの例

図2は2018年に東京都が実施した在留外国人へのアンケート調査結果である。これによれば使用してほしい言語として100人中98人が日本語

（ただし「やさしい日本語」を含む）を望んでいることが分かる。

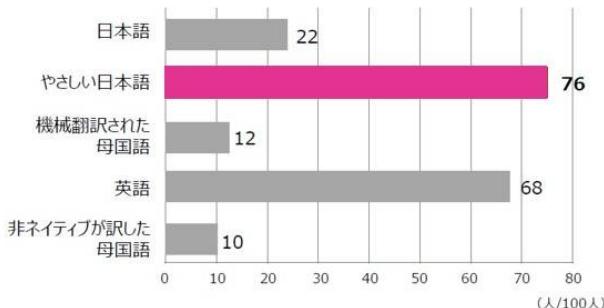


図2. 東京都在住外国人向け情報伝達に関するヒアリング調査（東京都/2018）

3. やさしい日本語

「やさしい日本語」普及に向けての活動が始まったのは1995年の阪神・淡路大震災までさかのぼる。当時現地では日本語で地震発生に関するニュースが伝えられた。しかし、現地在住の外国人（正確には非日本語母語話者）には難解な日本語であったため、日本人に比べ外国人の被災比率が高い結果となった。その反省から有志による「やさしい日本語」推進活動が始まったと言われている。

わが国では、一般に英語を苦手とする人が多い。これは別に日本人の言語習得能力が劣っているわけではない。そもそも日本では英語ができなくてもほとんどの人は不自由なく仕事や生活ができるという環境におかれているのが大きな理由だと考えられる。もうひとつ理由をあげるとすれば、日本語と英語は対極と言えるほど違いの大きい言語だということである。最初に習った外国語がたまたま英語であったため、外国語は難しい、日本語は特殊である、という思い込みが筆者を含め多くの日本人にあったのではなかろうか。

4. 日本語は特殊な言語なのか

結論から言えば、日本語は決して特殊な言語ではなく、よく似た外国語は少なくない。筆者が学生だった半世紀前、日本語はアルタイ語族と言われていた。アルタイ語族とはユーラシア大陸のアルタイ山脈にちなんだ名称で、ツングース語、モンゴル語、トルコ語などが含まれる。これらと日

本語との間には文法、発音等でかなりの類似性がある。モンゴル出身の力士がインタビューで流暢な日本語を話しているのは、本人の努力もさることながら、モンゴル語との類似性も一因と考えられる。

ただ、現在はアルタイ語族と日本語との関係は音韻対応（同じ意味の単語の発音が類似していること）が少ないとされ、同族であるとは言い切れないとされている。しかしながら、アルタイ語族に加え日本語によく似た韓国語（朝鮮語）を含めれば日本語の仲間は結構な数にのぼる。

もし日本人が最初に習う外国語がこれらの言語であったなら、いわゆる外国語アレルギーはなかったかもしれないのだ。

5. アフォーダンス視点から見た言語の共通性

上記の語族単位の類似性だけでなく、6900種類といわれる人類の話す言語にはかなりの共通性がある。もし、まったく共通性がないのであれば相互に翻訳は不可能であろう。

これについて言語学者のチョムスキイは人間は生まれながらにして普遍文法を持っているため、誰でもあらゆる言語の習得が可能と主張している。

このことをアフォーダンス視点から考えてみよう。アフォーダンスとは認知心理学者ギブソンが提唱した概念で、簡単に言えば「ヒトや動物は環境から受け取る（視覚）情報に従って行動する。そして、この（視覚）情報をアフォーダンスと定義する」と言うことだ。さらにこのアフォーダンスは動物毎に解釈が異なるとしている。

一方言語の発生プロセスを考えると、まず最初に人間の生活環境の中から生活に意味を持つ要素を切り分け、それに名前をつけたことから始まると推測される。例えば、他より高い地形を切り分け、それに「やま」という名前をつけたという具合である。この環境（世界）の切り分け方はアフォーダンスに依存するため、当然動物毎に異なる。逆に言えば、ヒト（ホモ・サピエンス）という同種の動物が、地球上という同一環境から受取るアフォーダンスは基本的に同一であると言えよう。ただ、その名前の付け方は地域により異なるのだ。

もし、生活環境も種も異なる知能の高い地球外生命体が人間と接触してきたとしたら、両者間のコミュニケーションはきわめて困難であろう。

6. メタファーの活用による言語の共通性

上記アフォーダンスの他に、メタファー（暗喩または広く比喩）による言語の共通性も考えらる。例えば、日本語には次のような表現がある。

- 1) 小樽から札幌に行く（空間移動）
- 2) 蛹から成虫になる（状態の変化）
- 3) 過労から病気になる（因果関係）

これは格助詞の「から」と「に」が原意では空間移動を表す単語であったが、その後メタファーの利用により意味が拡張され、状態変化、因果関係に転用されてきた例である。このような事例は日本語に限らず多くの言語に共通的に見出されメタファーは人類共通の思考プロセスと言えよう。

7. おわりに

以上述べてきたように、少なくとも日本国内において、日本語は外国人とのコミュニケーション手段として大いに活用すべきであると考える。

またその前提として今回は詳しくは触れなかったが、「やさしい日本語」の使用を心掛けることが重要である。

「やさしい日本語」を使用する上での具体的なガイドラインは、出入国在留管理庁と文化庁、あるいは一部の自治体が発行している。これらはそれぞれの公式ホームページからダウンロードすることができるので関心のある方は是非アクセスされることをお勧めする。

参考文献

- (1) 吉開章：入門やさしい日本語, 2023
- (2) 町田健：ソシュールのすべて、2004
- (3) 辻幸夫（編）：認知言語学への招待、2003
- (4) 服部四郎：日本語の系統、1999
- (5) J. ギブソン、古崎敬/他訳：生態学的視覚論、1985

ユニバーサルデザインと感性評価の共通性

柿山 浩一郎（札幌市立大学 デザイン学部）

1. はじめに

筆者は北のユニバーサルデザイン協議会（以後NUDA）の理事を務めているが、ユニバーサルデザインに関して見識を深めているとは言い難い。しかし、理事であるということからユニバーサルデザインの専門家としてお声がけを頂くことがあり、ユニバーサルデザインの社会的必要性の高さを実感しているところだが、ユニバーサルデザインの専門家として相談を受けた際には、自分の専門性を説明差し上げて丁重にお断りをせざるを得ないこともある。ただ、その出会いをきっかけに、日本感性工学会北海道支部（JSKEH）の一員である感性評価を研究テーマとする研究者として、僭越ながら助言を差し上げることになった経験が多々ある。つまり、ユニバーサルデザインの観点での問い合わせに対して、感性評価で答えを導き出す経験（思考の捻り出し）が多かったことになるが、結果として以下の見識に至った。

「ユニバーサルデザインが、聴覚や視覚の障がいによる社会的障壁の除去を目的としている観点と、感性評価が、人間が皆、異なる「感性（感じ方・捉え方）」を有している（システムモデルとメンタルモデルの一一致）ことによる認知的障壁の除去を目的としている構造が酷似している。」

本稿は、このような観点に至った筆者の思考の整理と、関連する日常での発見に関するエッセイである。

2. ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインの定義は、NUDA の WebSite^[1]によると「年齢・心身能力・使用環境などを問わず、あらかじめ多様な使用者を想定して、「できるだけだれにでも使いやすいデザイン」を目指す“創造提案型”的デザイン」である。例えば、NUDA と札幌市立大学 が担当した札幌市中央図書館のサイン計画では、「聴覚や視覚の障がいによる社会的障壁の除去」を目的に、障がいの当事者の方々への組織的対応・障がいの当事者の方へのご案内が、図 1 のようなパネルとして具現化されることになる。

3. 感性評価

一方、感性評価（*Kansei Evaluation*）とは、



図1. 聴覚や視覚の障がいによる社会的障壁の除去例



図2. ユーザー特性による認知的障壁の除去例

筆者の個人的な定義で言えば、「製品やサービスに対して、後天的に構築される無意識下のユーザーのセンサー（感性）により想起される、ユーザーの心理的・感覚的な印象を、数値化・分析することを通して、ユーザーの主観的な満足度や使いやすさ等を測定する」方法論である。例えば筆者が一部担当した評価研究である、家電製品の「見た目の使いやすさ感」では、「対象物に対するユーザー属性毎に異なる認知的障壁の除去」を目的に印象評価実験が計画される（図2）。

4. ユニバーサルデザインと感性評価の関連事例

ユニバーサルデザインと感性評価は一見異なる領域に見えるが、近年の研究では、ユニバーサルデザインの質を高めるうえで、感性評価が重要な役割を果たす事例が散見される。

ユニバーサルデザインの7原則には「誰もが利用できる公平性」や「簡単で直感的な使用にまつわる単純性」が含まれており、これらを達成する

には、単に機能的に使えるだけでなく、「心地よく使える」「安心できる」ことが求められる。このような心理的・感覚的な側面を定量的に扱う手法として、感性評価は有効である。

たとえば、権・日比野・小山（2009）ら^[2]は、高齢者が階段を歩く際の階段を見づらく感じる視覚的要因の調査を通して、カラーユニバーサルデザインの視点から、高齢者にとって視認性の高い階段の床と滑り止めの色彩について検討している。結果として、階段が見えやすく視認性を高くするためにはコントラストだけでなく色相も考慮した上での配色が望ましいとの結論を得ている。塙田・酒井・加藤（2016）ら^[3]は、盲導犬の社会参加促進における課題を明らかにすることを目的に、盲導犬に対する一般市民の主観評価を区間AHP法などを用いて明らかにしている。また、横山・塩川・山岡（2010）ら^[4]は、高齢者の住宅内における螺旋階段に設置する垂直手すりを対象に「使いやすさと実用性」を主観評価と赤外線カメラを用いた3次元動作解析により、若年者にも効果的であることを含めて実証している。

以上の事例は、感性評価を通じてユーザーの潜在的なニーズや不安を可視化し設計に反映することで、より包括的で魅力的なユニバーサルデザインを実現するものであり、ユニバーサルデザインと感性評価は単なる補完関係にとどまらず、相互に進化を促し合う統合的な関係にあるといえる。

5. 日常的な事例

以上のように、統合的な関係にあるユニバーサルデザインと感性評価であるが、ここで、両者の根底にあるであろうメンタルモデルに関する日常的な事例をあげる。

図3の写真は、一般的な車のエアコンの操作パネルであるが、このパネルが「使いにくい」と評価するユーザーに出会った。感性評価の専門家の立場から、このユーザーに対しいろいろな観点で話を聞いたところ（デプスインタビュー）、このユーザーが「特別ではない」ものの、この車のエアコンの操作パネルのシステムモデルと異なるメンタルモデルを有していることに気がついた。具体的には、このユーザは「暑いときには冷房を稼働させ、寒いときには暖房を稼働させ、稼働後、温度設定をする」メンタルモデルを強く有していた。これは、現代人であれば当たり前の感覚であるが、車のエアコンのシステムモデルは「Air



図3. 日常的なメンタルモデルの相違例

Control」つまり「空調」であり「ユーザーはエアコンを稼働させ希望の温度を設定するのみで、後は機械が設定温度と車内温度を比較して冷風を出すか温風を出すかを自動的に行う」モデルである。この事例は、社会における障がいの有無を含めた個人の特性への配慮の重要性を理解するのに適した事例であると考えられる。

6. 終わりに

結論として、ユニバーサルデザインの本質は「誰もが心地よく使える」環境の提供であり、その実現には感性評価という主観的価値の理解が不可欠である。機能性と感性の両立こそが、これから共生社会にふさわしいデザインの在り方ではないだろうか。

7. 参考文献

- [1] 「ユニバーサルデザインとは？」：北のユニバーサルデザイン協議会 WebSite <http://nudaweb.jp/ud.html> , 2025年5月31日閲覧
- [2] 権 未智, 日比野 治雄, 小山 慎一：「高齢者に対する視認性の優れた階段の配色：転倒事故の予防を目指して」, デザイン学研究/56巻,(2009)3号, pp.99-108, 2009年
- [3] 塙田 愛可, 酒井 正幸, 加藤 淳一：「盲導犬に対する印象評価研究－盲導犬の認知度および形態評価に基づく分析－」, 日本感性工学会論文誌/15巻, (2016)3号, pp. 415-423, 2016年
- [4] 横山 精光, 塩川 満久, 山岡 俊樹：「階段用新手すりに対する使用感評価－ユニバーサルデザインのための使いやすい住宅用手すりの仕様－」, 日本感性工学会論文誌/9巻, (2009)3号, pp. 531-538, 2010年

じぶんの見かた - じぶん観察日記 -

小宮加容子（札幌市立大学デザイン学部）、細谷多聞（札幌市立大学デザイン学部）

1. はじめに

2023年6月より札幌市保健所と共同で、小児慢性特定疾病児童を対象に将来の社会的自立を目指した支援ツール「じぶん観察日記」制作に取り組んだ。小児慢性特定疾病児童とは、悪性新生物や慢性腎疾患、慢性呼吸器疾患、慢性心疾患など慢性的な疾患を抱える児童のことである。

この児童たちが、将来、就職をし、社会で自立した生活を送るために、早い時期から自分の興味関心、得意・不得意などを知ること、「お仕事（働くということ）」を知ることなど、自分をみつめ、社会を知り、考える機会が必要である。また、学校生活や就職先で必要な支援を受けるためには、自分自身で権利、利益、ニーズを主張すること（セルフアドボカシー：自己権利擁護）が大切である。

しかし認知発達の視点からみると、学童期は自己中心的な考え方から他者を理解ができるようになる成長の時期である。そのため、自分を客観的に見たり、その気持を他者へ伝えたり、他者の気持ちに共感をしたりすることが上手くできるとは限らない。制作した「じぶん観察日記」では、主観的視点から客観的視点へと見方が広がるように質問の仕方に工夫をしたり、他者への質問を通して、会話や自己表現の練習ができる構成にした。

2. 客観から主観へ

「一人称童話シリーズ」という絵本がある^[1]。このシリーズでは「桃太郎」、「シンデレラ」、「浦島太郎」が現在までに発売されている（図1）。これらは誰もが知っている昔話である。しかし、従来の絵本とは異なり、絵は主人公の目線で描かれ、文章は自らの語りとなっている。例えば、桃太郎が鬼ヶ島で鬼に立ち向かう場面では、桃太郎自身の姿は見えず、こちらを睨んでいる鬼の表情と姿が描かれている。そして、

「ぼくは刀をぬきました。」

「でもどういうわけか、足が前にうごきません。」

「ぼくは鬼がこわいと思いました。」

というように、主人公の心の声が文章となって書かれている。この絵本を読む子ども達は主人公の視点を借りて物語の世界に入り、主人公の気持ち

を感じることができるように工夫されている。絵本の紹介文には「3人称から1人称へ。客観から主観へ」とある。視点を変えることで、より他者の気持ちを想像すること、共感することができる^[2]。



図1 「一人称童話シリーズ」の絵本^[2]

3. ソーシャルスキル

ソーシャルスキルとは人間関係や社会生活に必要なスキルのことであり、それを学ぶためのトレーニングはソーシャルスキルトレーニング（SST : Social Skills Training）と呼ばれている。SSTの始まりは精神科領域で実践されていた支援方法であるが、現在では教育領域、就労支援関連領域など様々な分野で実践されている。小学校の授業科目には「道徳」があり、授業の中で歴史上の人物を取り上げ人生の教訓を学んだり、物語を読んで人を思いやる気持ちを学んだりする。道徳は「気持ち」を考える科目であるが、ソーシャルスキルトレーニングは、実際の生活の中で、どのように考え、どのように行動したらよいのかを学ぶ点が異なる。

プログラムの流れは、

Step1 インストラクション（目的を伝える）

Step2 モデリング（手本を見せる）

Step3 リハーサル（練習・実演する）

Step4 フィードバック（振り返る）

である。

例えば、「気持ちの良い挨拶をしよう」という挨拶の場面を設定したとする。Step2では、挨拶の言葉やその意味、声の出し方や表情などをクラス全員で共有する。そして、Step3で実践してみ

る。最後に Step4 で挨拶をした側、された側の気持ちや気づきを振り返る^[3]。このように頭で理解する、考えるだけでなく、実践することで行動し、身体を使う。最後に振り返りをすることで自分の感情と向かい合うことができるのである。

4. じぶん観察日記

冊子の名称は、「自分のことを観察して（=しっかり見て）、自分を知る。そして、後から見直すことで、自分の成長を知る」ことができるよう にと想いを込め、「じぶん観察日記」とした。対象は難病を持つ小学校中学年～中学生としている。冊子は観察日記を模したレイアウトデザインとし、子どもが自分の考えや気づいたことなどを書き込むことで完成する形式を探った。もちろん、先に紹介した子ども向けの絵本や書籍、ソーシャルスキルトレーニングなどを参考に大きく 7 つで構成した。

【小学校中・高学年が対象のページ】

1. 自分のことを知る

自分の興味関心（主観）、他者から褒められたこと（客観）などを整理し、自分を見つめ直す。

2. 仕事の本質を見る

身近な大人へのインタビューを通して、その職業を選んだきっかけや、働くことの楽しさ、大変さを知る。

3. 多様にある職業を分析する

似ている仕事をまとめ共通点を挙げる、自分の興味がある職業をみつける。

4. 病気を知る

病名、症状、病気による苦手なことを知り、その対応策を考える。

5. 気になる職業と自分の特性をマッチングする

漠然としていた職業のイメージと、今の自分とのつながりを明確にする。

【中学生が対象のページ】

6. 自分のことを他者へ伝える

就職・進学アドバイザー（大人）を相手に、興味がある仕事やその理由、病気のことなどを伝えることで、自分の考えや気持ちを整理する。また、他者へ伝えるための言葉選び、説明の仕方などを知る。

7. 将来の夢が実現するための準備を計画する

就職・進学アドバイザー（大人）からのアドバイスとして、希望を実現するために必要な準備（資格、体力・健康、学力など）を具体的に考える。

1 つの冊子にまとめているが、対象年齢の子どもの興味関心や理解力、発想力に適した質問設定、言葉使い、イラスト表現、文章量、ページ数等を吟味し、誌面のデザインに反映させている。



図2 「じぶん観察日記」と
ページの一部（お仕事図鑑ページ）

5. まとめ

筆者の研究テーマは誰もが一緒に楽しむことができるあそびのデザインである。普段は、あそびを企画・実践し、その中で人の行動と環境の関係性や、人の心の動きと行動の関係性など“人”を観察している。これらの経験が「じぶん観察日記」の制作に活かされていると考えている。（「じぶん観察日記」は、2025年5月より札幌市Webページにて公開されている^[4]。ひとりでも多くの子どもが、日記を通して新しい自分を見つけることができるることを願っている。

参考・引用文献

- [1] 絵本「一人称童話シリーズ」：株式会社高陵社書店, 2017.
- [2] 絵本「一人称童話シリーズ」：2018年グッドデザイン金賞,
<https://www.g-mark.org/gallery/winners/9de984cf-803d-11ed-af7e-0242ac130002>, 2025年6月8日閲覧
- [3] 「クラスが変わる！子どものソーシャルスキル指導法」：ナツメ社, 2017年
- [4] 「じぶん観察日記」：札幌市Webページ,
<https://www.city.sapporo.jp/hokenjo/syounen-jiritsusien-syuusyoku.html>, 2025年6月8日閲覧

札幌イメージコーディネート研究会 (SICS) について

伊藤雅彦 (株伊藤塗工部)・大渕一博 (札幌市立大学)

1. 札幌イメージコーディネート研究会とは

札幌イメージコーディネート研究会 (Sapporo Image Coordinate Study, 以下 SICS) は、色とイメージの関係を正しく理解し、自分の感性をより洗練させることを目的としています。

『イメージ9分類』を主とした感性マーケティングの第一人者である宮内先生 [静岡文化芸術大学名誉教授, SICS主宰] のもと、その手法と活用を学ぶために、「色」を扱うさまざまなジャンルの有志が集まり 2000 年に発足した個人参加型の研究活動組織です。

色やイメージの有効な活用により、北海道の発展に寄与することを目的に 25 年に渡り、研修や研究活動を行っています。具体的には、年 6 回、宮内先生を招いて 1 日日程で研修を行っています。研修では、午前は 2 時間半程度の講義、午後から 3 時間程度の演習を行っています。演習については 1 年を通じたテーマが与えられます。

2025 年 3 月現在で、19 名が参加しています。

2. これまでの活動…景観 70 色

札幌市では、一定規模を超える建築物等の建築等を行う場合に景観形成基準を定めています[1]。この基準は、美しい札幌の景観づくりの実現方策の一つであり、建築物等が周辺環境に調和し、誰もが美しいと感じる魅力ある札幌の色彩環境を創出することを目的としています。その色彩を決定するために、「色彩景観基準運用指針等」(札幌の景観色 70 色) が定められています(図 1) [2]。



図 1 札幌の景観色 70 色 [2]

この「札幌の景観色 70 色」は宮内先生が監修して 2004 年に作成されました。当時 SICS に所属していたメンバーは、2001 年 8 月に札幌市内で、大規模構造建築 (マンション、商業施設等) の撮影を行い、景観分析の資料となる写真を提供しました。また、筆者の 1 人である大渕は、これらの写真を分析して、その色彩分布を抽出するアプリケーションを開発して、作成に協力しました。

「札幌の景観色 70 色」は、各々が、風土イメージを想像できるオリジナルの札幌らしい色名を持っています。これは、設計上の誘導基準であるだけではなく、人々の心にはたらきかけ、心に留めておけるように名付けたものです。

またそれぞれの色には、オリジナルのストーリーが付加されています(図 2)。「色から言葉へ、言葉から色へ」。色彩の世界を楽しみ、札幌の街を色彩から考えるきっかけになればという願いが込められています。

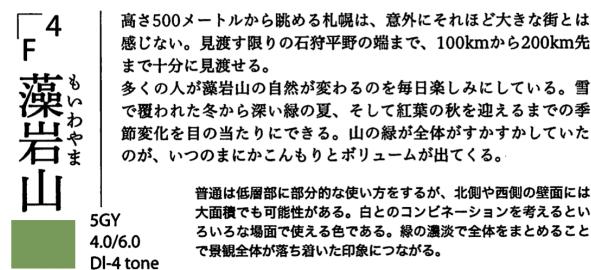


図 2 景観色 70 色ストーリー (一部抜粋)

SICS では、2010 年に「札幌の景観色 70 色普及委員会」を発足させ、普及活動も行っています。

同じ色でも、明るさ、大きさ、素材の違いなどで微妙に変化します。平面的な色見本だけでは捉えにくい環境の変化を、現場で確認し、周辺建築物などとの色彩調和を図ることを目的として、この「札幌の景観色 70 色 立体カラーガイド」を作製しています(図 3)。



図3 札幌の景観色 70色 立体カラーガイド

また、この他にも「札幌の景観色 70色 カラーガイド」を作製しています(図4)。



図4 札幌の景観色 70色 カラーガイド

「札幌の景観色 70色」は、様々な札幌市内の建築物で活用されています。円山動物園のウッドデッキ(使用色:蝦夷鹿[えぞしか]), すすきの交差点の時計塔(使用色:新雪[しんせつ]), 北海道電力屋上鉄塔(使用色:水晶白[クリスタルホワイト]), 五輪大橋(使用色:藻岩山[もいわやま])など、身近な場所に見ることができます。

3. これまでの活動…その他の景観に関する活動

「札幌の景観色 70色」の普及以外にも、様々な活動をしています。

- ・『日本デザイン学会第59回春季研究発表会』企業ブース出展[於:札幌市立大学](2012年6月)
- ・札幌テレビ塔塗り替えへの提案書提出(2012年11月)
- ・「さっぽろ景観フェス2014inノルベサ」参加(2014年11月)
- ・北海道新聞「札幌の景観色70色」制定10年記事掲載(2014年11月)
- ・ロープウェイ入口電停周辺の景観まちづくり意見交換会(2015年3月)

- ・景観70色カラーストーリー冊子作成(2015年11月)
- ・セミナー「消費者に選ばれるワケを明確に知る」開催(2015年11月)
- ・藻岩山山麓地域景観分析まちづくり提案(2016年1月)
- ・セミナー「街づくり『景観カラーガイドライン』に向けて」開催(2017年2月)
- ・ななまるマルシェ開催(2018年1月)
- ・セミナー「仕事で差がつく感性マーケティングセミナー」開催(2018年11月)
- ・セミナー「仕事で差がつく感性マーケティングセミナーPart.2」開催(2019年11月)

4. これまでの活動…幼児教育に関する活動

2010年より、幼児期の色彩体験を重視した『幼児のための色彩教育プロジェクト』を立ち上げ、「3世代嗜好傾向調査アンケート」の実施や、児童に向けた色彩教育プログラムや教材の開発実施に取り組みました。具体的に、以下のよう活動を行いました。

- ・教育プロジェクトチーム発足(2010年5月)
- ・色遊び教室(2010年8月~2014年2月, 10回開催)
- ・おもしろ実験室(2011年11月~2012年10月, 3回開催)
- ・苗穂小ミニ児童会館10周年記念式典 ブース出展(2011年10月)

5. おわりに

宮内先生のご指導のもとで研鑽を積みたいというメンバーを募集しています。お試し参加も可能ですので、ぜひSICS事務局(office@sics-sapporo.com)までお声がけください。

参考文献

- [1]札幌市、「届出等に関する解説、ガイドライン」,
<https://www.city.sapporo.jp/keikaku/keikan/guideline/guideline.html>, 2025年4月1日閲覧
- [2]札幌市、「札幌の景観色70色カラーチャート」,
<https://www.city.sapporo.jp/keikaku/keikan/keikanyuudou/keikansyoku.html>, 2025年4月1日閲覧

編集後記

このたび、NPO 法人 北のユニバーサルデザイン協議会 (NUDA) と日本感性工学会北海道支部 (JSKEH) が合同で編集した雑誌「Hokkaido U&K Journal」を創刊することになりました。私たちの身近な暮らしの中に深く関わっている感性工学とユニバーサルデザインをテーマとしつつ、研究者だけでなく、地域の方々やデザイナー、福祉関係者など、さまざまな立場の方に読んでいただける誌面を目指しました。

今号では、創刊にあたり両団体の代表による巻頭言、様々な視点によるユニバーサルデザインに関するトピック3件のほか、小児慢性特定疾病児童への支援、色とイメージを研究テーマとした活動団体の紹介など、多様な原稿が集まりました。本誌の魅力であるゆるやかなジャンルの広さがよく表れたラインナップになったと思います。

誰もが気軽に投稿できる雑誌を目指しておりますので、読者のみなさま、またお知り合いやご指導されている学生などにもお声がけいただき、ぜひ投稿いただければ幸いです。

本誌が、だれかの気づきやアイデアのきっかけとなり、よりやさしい社会づくりにつながれば嬉しく思います。今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします。

「Hokkaido U&K Journal」編集委員会 委員長 大渕一博
札幌市立大学デザイン学部講師／日本感性工学会北海道支部 幹事

Hokkaido U&K Journal

Vol.01 : June 2025

編 集 「Hokkaido U&K Journal」編集委員会
委員長…大渕一博
委 員…酒井正幸, 柿山浩一郎

表 紙 デ ザ イ ン 柿山浩一郎

発 行 日 2025年6月27日

発 行 NPO 法人 北のユニバーサルデザイン協議会 (NUDA) ・
日本感性工学会北海道支部 (JSKEH)
